P43

歴史災害の記録を活用した防災学習教材の検討

Study of Disaster Prevention Learning Materials Using Historical Disaster Records

○黒澤宗一郎・矢守克也
○Soichiro KUROSAWA, Katsuya YAMORI

The purpose of this study is to create disaster prevention learning materials that will assist in understanding the potential problems of modern disasters by incorporating the perspectives of historical disasters and their disaster victims. Problems that are less visible in modern disasters may manifest themselves more prominently in historical disasters. This is because their manifestations and effects are more likely to be more pronounced in times when legal systems and customs are quite different from those of today. By incorporating prominent analogies in historical disasters into the learning materials, we aim to make it easier for learners to consider the "invisible problems" of modern disasters. At this stage, four themes have been established, including "discrimination and prejudice against disaster victims," and appropriate examples from historical disasters (e.g., the 1888 Mt. Bandai eruption and the 1923 Great Kanto Earthquake) and modern disasters are being collected for each theme.

1．はじめに

本研究の目的は、現代の災害／防災に潜在している問題やその生起構造に関する理解を補助する防災学習教材を、歴史災害やその被災者の視点を盛り込んで作成することである。

災害発生から復興に至るまでの各段階でどのような問題が生じ得るのかを事前に学習しておくことは、実際に自分が被災者になった場合に冷静な判断を下すことができるか否かに関わるため極めて重要である。だが、そうした問題のなかには社会的認知度が低いために平時にはそもそも問題として意識することが難しいものや、現代における具体的な事例を提示することが学習者の心理状況に悪影響を及ぼしてしまう可能性のあるものも少なくない。そうした「見えにくい問題」に関する議論のハードルを下げるための教材があれば、これまで防災学習で取り上げられる機会の少なかったテーマについても、その議論の輪を広める契機になる。

このような「見えにくい問題」のなかには、その生起構造が現代災害と歴史災害に通底して存在しているものが複数ある。そして、生起構造が通底していても、法制度や習慣等が現代とはまったく異なる時代に発生した問題の方がその表出や影響がより顕著で見えやすい場合がある。歴史災害における顕著な類例を教材に盛り込むことで、学習者が現代災害における「見えにくい問題」を容易に考察できることを目指している。

2．教材作成の方法

災害時に発生し得る問題を災害前に我が事として認識し、議論することができる防災学習ツールとしては既にクロスロードや防災 4 コマ漫画などが考案されている。本研究で作成を検討する教材の形態もこれらの学習ツールをある程度踏襲したものになると考えているが、具体的な形態を決定する前に教材の核となる 3 要素を選定する必要がある。その 3 要素とは「どのような『見えにくい問題』を扱うのか」「歴史災害における事例は何か」「現代災害における事例は何か」である。

教材のテーマともなる第一の要素については表 1 のように選定した。

取り扱うテーマ
「私を捨て公に殉ずる行為」の前提化と称揚
被災者（生存者／犠牲者）に対する攻撃
災害時における隠蔽圧力
災害の「予測」と帰責の行方

表 1：教材で取り扱うテーマ

これらのテーマについて、歴史災害と現代災害の双方における適例を史料／資料から探索した。また探索の過程で新たにテーマが発見される場合もあった。現段階では各テーマについて類例の充実を図っており、その後それぞれに適した教材形態や学習のねらいを検討していく。

3. 各テーマにおける歴史／現代災害の例

前項で取り上げた各テーマについて歴史災害と現代災害双方における事例を探索した。たとえば「『私を捨て公に殉ずる行為』の前提化と称揚」に相当する事例としては、関東大震災（1923）後に東京府が編纂した『大正震災美績』に収録された美談[1]と、東日本大震災（2011）に際し防災無線で避難を呼びかけた後に津波にさらわれた南三陸町職員の犠牲[2]が挙げられる。『大正震災美績』では、地震後に郵便局長の命令でいつ崩れるか分からない郵便局に戻って重要書類や大金を回収し、それを抱えたまま大火災から逃げ延びた局員や、御真影を死守しながら避難し「延焼するから荷物を持って逃げるな」と咎められても強行突破した商人の逸話等が、実名と共に「美談」として記されている。

このテーマでは個々の行為の是非を論じたり「過去の人々は現代では考えられない、非常識なことをしていた」という二元論に着地させるのではなく「こうした行いを美談として継承すべきなのか」という正解のない問題について歴史災害と現代災害を比較しながら論じることを主眼としている。

また「被災者（生存者／犠牲者）に対する攻撃」に相当する事例としては、磐梯山噴火（1888）における長坂集落への誹謗中傷[3]と、福島第一原発事故（2011）における双葉病院関係者に対するバッシング[4]が挙げられる。前者は火山泥流によって避難途中の住民の多くが犠牲になった集落について、当時の新聞や学会誌が「老幼を見捨てて逃げた若者が避難途中に犠牲になった」という誤った風聞を流布し、被災者に対するいわれなき誹謗中傷を助長した。後者は「原発事故後、病院関係者が患者を見捨てて先に避難した」という誤報が激しいバッシングを招いた事例である。

このテーマでは単に歴史上の類例を紹介するのではなく、現代よりも被災者が抗議の声を上げにくく、それを社会に発信する術も限られていた時代の事例を提示することで、現代における誤情報拡散についてより切実に学習者に訴えかけることを主眼としている。

4. 今後の展望

こうしたテーマと事例を用いて教材を作る上で重要となるのは、現代の問題と似ている歴史上の事例を紹介することに終始してしまわないように注意することである。歴史上の事例を鑑みることで、各問題の生起構造を明確にし，多角的かつ俯瞰的な考察やそれに続く議論に接続できる教材設計を目指す。例えば「公務員であっても職務よりも命を優先するのが当然」と考える現代の学習者が、職務を優先し斃れた官吏を称揚する過去の事例に違和感を覚えつつも、それに類似した現代の事例や「自己犠牲を称えるべきなのか」「現代を生きる我々は、職務よりも命を優先した人を本当に非難しないのか」といった問いかけを通じて『見えにくい問題』を再認識できるような学習過程を実現したいと考えている。

5. 参考資料

[1] 東京府『大正震災美績』1924. https://dl.ndl.go.jp/pid/981883/1/2
[2] 朝日新聞「骨組みだけの防災庁舎、保存を断念 南三陸、遺族に配慮」(2011.9.20 付)
[3] 米地文夫『磐梯山爆発』古今書院，2006.
[4] 朝日新聞「双葉病院、50 人はなぜ死んだ 避難の惨劇と誤報の悲劇」(2021.2.17 付)